

# 人麻呂歌集「枕問答」歌の訓釈

——万葉集卷十一・二五二五、二五一六番歌の読み——

大 浦 誠 士

## 一 はじめに

万葉集の卷十一には、「以前一百四十九首柿本朝臣人麻呂之歌集出」という左注によって括られた、いわゆる人麻呂歌集所出の歌が載せられている。その末尾には、「問答」という標目のもとに九首の歌が見られ、その末尾に載るのが、次の二首の問答歌である。

布細布 枕動 夜不寐 思人 後相物（11・二五一五）  
敷細布 枕人 事問哉 其枕 苔生負為（11・二五一六）

この二首は、訓釈に揺れの多い人麻呂歌集歌の中にあっても、特に訓釈の定まらない歌であり、近年の注釈書に到っ

ても、いまだに決定的な理解が示されていない。本稿は、右の二首について、その訓読と解釈とを追求することを目的とする。

## 二 二首の訓読史と訓読上の問題点

まず、諸本の漢字本文と訓であるが、漢字本文は、若干の異同が見られるものの、ほぼ右に示したもので間違いないものと思われる。一首目（以下、問歌）の訓は、第二句までは「シキタヘノ マクラウコキテ」で揺れはないが、以下

いねられす おもひしひとに のちにあふものか（嘉・類）

イネラレス ヲモヒシヒトニ ノチアハムモノカ（古）「チ」ノ右下ニ「ニ」アリ。

イネラレス オモヒシヒトニ ノチニアフモノカ（細）

ヨルモネス オモフヒトニハ ノチシアハムモ（細左）

ヨネラレス オモヒシヒトニ ノチカアハムモ（文・西・温・矢・京）

ヨルモネス オモフヒトニハ ノチモアハムモ（寛・無・附）

など、さまざまに訓じられている。近世の注釈書でも、童蒙抄に第二句を「マクラウコカシ」とし、第三句を万葉考に「イヲモネス」、略解に「ヨヲモネス」とし、結句を童蒙抄に「ノチアフモノカ」、代匠記・精に「ノチモアフモノ」とするなど、異訓が次々と提示されている。二首目（以下、答歌）の方は、諸本の訓は第二句まで「シキタヘノ マクラセシヒト コトトヘヤ ソノマクラニハ」で揺れはなく、異同は結句に集中する。

こけおひにけり（コケヲヒニケリ）（嘉・古）

こけおいにけり（類）

コケオヒニタリ（細）左ニ「ムシ」アリ。

コケムシニタリ（神・西・文・温・矢・京・寛・無・附）西・京ハ左ニ「オヒ」アリ。

大まかに見て、「生」が古くはオヒと訓まれていたものが、ムシと訓まれるようになり、「為」が古くはケリと訓まれていたものが、タリと訓まれるようになったという動きを見て取ることができる。近世の注釈書では第二、三句を代匠記・精に「マクラニヒトハ　コトトヘヤ」と訓じ、井上新考は「マクラキシヒト　カレヌレヤ」としている。結句を童蒙抄に「コケムシニケリ」、代匠記・初に「こけおひをせり」としている。

近世以前の訓では、

問歌①第三句「夜不寐」をどう訓むか。

②第四句の「思」に過去の助動詞「き」の連体形「し」を読み添えるか。

③結句の「後」の下にどのような助動詞を読み添えるか。

④結句「物」をどのように訓じるか。

答歌①結句「生」をオヒと訓むか、ムシと訓むか。

②結句「負為」をどのように訓じるか。

といった問題点が浮かび上がってくる。

近代に入ってから注釈書でも、二首には様々な訓が試みられている。大きな訓の改編は、問歌の第二句、第三句と、答歌の第二句、第三句に見られる。まず注目されるのは、折口信夫口訳万葉集が問歌第二句の「動」をトヨミテ

と訓んだことであろう。「動」をトヨムと訓むことは、それまでの訓には見られず、また、後に検討するが、答歌との照応関係においても画期的な改訓であった。トヨミテの訓は澤瀉注釈、万葉集全注（卷十一担当稲岡耕二）、伊藤釈注等にも採用されている。全集が問歌の第三句「夜不寐」を「夜も寝じ」と訓じ、男が相手の女の状況を思いやっての表現と解釈するのも、新しい訓釈である。答歌では、第二句「枕人」が旧訓のマクラセシヒト以下、「枕」を動詞的に訓ずる訓みが多く見られたのに対し、代匠記・精の「マクラニヒトハ」の流れを受けて、「枕に人は」（私注・大系）、「枕は人に」（全集・新編全集・伊藤釈注・新大系）、「枕も人に」（全注）など、「枕」を名詞的に訓じて、枕と人との関係の言問いの関係を考えるものが大勢を占めている。第三句「事問哉」は旧来コトトヘヤと反語に訓まれていたのに対し、武田全註釈が「言問ふや」と疑問に訓む訓を提示し、土屋私注、大系、全注などが、その訓によっている（ただし全註釈、私注、大系が人を主体とするのに対し、全注は枕を主体とする）。

以上のような訓読の諸説を見ると、右に示した訓読上の問題点の他に、

問歌⑤第二句「動」をウゴキテと訓むか、トヨミテと訓むか。

答歌③第二句「枕人」をどのように訓むか。

④第三句「事問哉」を疑問に訓むか、反語に訓むか。

といった問題点を加えることができる（もちろんその他、細かい点にも多くの問題点があるが）。以下、それらの点について検討してみたい。

### 三 問歌の訓

まず、問歌の訓について、比較的客観的に検討できる範囲を見ていこう。

第二句「枕動」。旧訓にマクラウゴキテとあったところに、最初にマクラトヨミテの訓を提示した折口口訳には、「動」字をトヨムと訓むべき根拠が示されないが、澤瀉注釈は、「ここは前(二五二三、二五二四)の二首の「動」と共にトヨミと訓んだ方がよくはないかと橋本四郎君が云はれる。」と言ひ、全注は、『動』は『燥』の意のあること既述の通りで、次歌との関係からウゴキよりトヨミがふさわしいと思う。」と述べている。澤瀉注釈の言う前二首とは、

雷神 小動 刺雲 雨零耶 君将留(11・二五二三)

雷神 小動 雖不零 吾将留 妹留者(11・二五二四)

の二首である。第二句の「小動」はスコシ(シマシ)トヨミテ、スコシ(シマシ)トヨモシと訓まれており、引き続いての歌ゆえ、トヨミテと訓むのがよいというのが、澤瀉注釈所引の橋本説であるが、ここは人麻呂歌集歌全体を見わたしておく必要があるだろう。人麻呂歌集歌において「動」字は、当該歌と右の二首の他、

動神之 音耳聞 卷向之 松原山乎 今日見鶴鴨(7・一〇九二)

吾世子 裏戀居者 天漢 夜船傍動 梶音所聞(10・二〇一五)

遥娛等 手枕易 寐夜 鷄音莫動 明者雖明(10・二〇二二)

に見られる。一〇九二では雷を意味するナルカミが「動神」と表記される。二〇一五、二〇二二はいずれも七夕歌の例であるが、二〇一五では伝聞推定の助動詞「なり」が「動」で表記され、二〇二二では動詞「鳴く」が「動」で表

記される。三者三様の用法であるが、いずれも音に関する訓（二〇一五の「滂動」はコギトヨム、二〇二一の「莫動」はナトヨメと訓む説もあるが、いずれも音に関することは変わりない）となっていることは注意してよい。先の二首も含めて、人麻呂歌集においては、「動」字は音に関わる語の表記となっていると言つてよいであろう。全注（二五一三番歌の【注】）にも指摘があるように、「動」は篆隸万象名義に「徒董反躁也行也出也作也」とあり、「躁」に通じる文字である。後に解釈の条で触れるが、答歌に「枕人 事問哉」とあることとの関連からも、「枕動」は音に関する訓と考え、マクラトヨミテ、マクラサワキテ、マクラノナリテなど、聴覚的な動詞として訓むのが適當と思われる。

第三句「夜不寐」。旧訓に見られるイネラレスの訓は、「夜」字を訓まない点で不適當であろう。ヨネラレスは助動詞「らる」を読み添える点が不自然であるとともに、非常に詰まった感のある訓である。近年の注釈書ではヨルモノネズの訓をとるものが多い（全釈・総釈・全註釈・窪田評釈・大系・注釈・集成・釈注ナド）が、茂吉評釈・佐佐木評釈はヨモイネズ、土屋私注・全注はヨルモイネズとしている。違いは「寝」をヌと訓むかイヌと訓むかである。万葉集中の用例を見ると、ヌとイヌとの使い分けについては、別に論を必要とするほど錯綜しているが、打消や反語を伴つて眠れないことを表現する際には、

安騎の野に宿る旅人うち靡き寐も寝らめやもいにしへ思ふに（1・四六）

大和恋ひ寐の寝らえぬに心なくこの洲崎廻に鶴鳴くべしや（1・七一）

みもろの神の神杉已具耳矣自得見監乍共寝ねぬ夜ぞ多き（2・一五六）

皆人を寝よとの鐘は打つなれど君をし思へば寐ねかてぬかも（4・六〇七）

布留山ゆ直に見わたす都にぞ寐も寝ず恋ふる遠くあらなくに（9・一七八八）

心なき秋の月夜の物思ふと寐の寝らえぬに照りつつもとな（10・二二二六）

白栲の手本ゆたけく人の寝る味寐は寝ずや恋ひわたりなむ (12・二九六三)

白真弓斐太の細江の菅鳥の妹に恋ふれか寐を寝かねつる (12・三〇九二)

歸りにし人を思ふとぬばたまのその夜は我れも寐も寝かねてき (13・三二六九)

寐も寝ずに我が思ふ君はいづくへに今夜誰れとか待てど来まされ (13・三二七七)

妹を思ひ寐の寝らえぬに曉の朝霧隠り雁がねぞ鳴く (15・三六六五)

妹を思ひ寐の寝らえぬに秋の野にさを鹿鳴きつ妻思ひかねて (15・三六七八)

夜を長み寐の寝らえぬにあしひきの山彦響めさを鹿鳴くも (15・三六八〇)

秋の夜を長みにかあらむなぞこば寐の寝らえぬもひとり寝ればか (15・三六八四)

宮人の安寐も寝ずて今日今日と待つらむものを見えぬ君かも (15・三七七一)

に見られるように、睡眠を意味する名詞「寐」と複合して用いられるのを基本としている。当該歌も眠れないことを言うで見られるので「不寐」はイネズの訓を採るべきであるが、ヨモイネズ(新訓・茂吉評釈・佐佐木評釈など)の訓は、全注にも指摘があるように句中に単独母音イを含むために準不足音句となるため、ヨルモイネズと訓むのが適当と思われる。

結句「後相物」。人麻呂歌集所収歌において、「物」字は一九例(一七首)見られ、うち、「物語」(7・一二八七)、「甘物」(7・一二九八)、「物念哉」(10・一八九二)、「苦物叙」(10・二〇二五)、「恋物」(11・二三七二)、「死物」(11・二三九〇)、「可恋物」(11・二三九一)、「物有」(11・二四〇四)、「物不念有」(11・二四三六)、「尽不得物」(11・二四四二)、「物不念」(13・三三〇九)の一一例は、実質名詞、形式名詞の別はあるものの、自立語の表記に用いられた例である。付属語の表記に「物」字が用いられたと思われる例は、次の八例となる。

## ○助詞「も」の表記

江林 次完也物<sup>ふせるしやも</sup> 求吉 白袴 袖纏上 完待我背（7・一二九二 略体旋頭歌）

物不念<sup>れぞも</sup> 路行去裳 青山乎 振酒見者 都追慈花 尔太遙越賣 作樂花 佐可遙越賣 汝乎叙母 吾尔依云<sup>わ</sup> 吾

乎叙物 汝尔依云 汝者如何念也 念社 歳八年乎 斬髮 与知子乎過 橘之 末枝乎須具里 此川之 下母長

久 汝心待（13・三三〇九 非略体）

## ○助詞「ものを」の表記

戀敷者 氣長物乎<sup>けながきものを</sup> 今谷 乏之牟可哉 可相夜谷（10・二〇一七 非略体）

息緒 吾雖念 人目多社 吹風 有數々<sup>あふべきものを</sup> 應相物（11・二三五九 非略体旋頭歌）

何為 命繼 吾妹 不戀前<sup>しなましものを</sup> 死物（11・二三七七 略体）

玉響 昨夕 見物<sup>みしやものを</sup> 今朝 可恋物（11・二三九一 略体）

隱沼 從裏戀者 無乏 妹名告<sup>いむべきものを</sup> 忌物矣（11・二四四一 略体）

白玉 間開乍 貫緒 縛依<sup>のちもあふものを</sup> 後相物（11・二四四八 略体）

「物」が借訓仮名として「も」の表記となる二例は、音数律と「也物」、「叙物」という表記のあり方から、「も」と訓みうる形となっている。「ものを」の表記と見られる例のうち、「氣長物乎」（二〇一七）、「忌物矣」（二四四一）の二例は、「を」が文字化されており、「ものを」と訓むことがほぼ確実な例である。「物」のみで付属語が表記される例に目を向けると、二三五九は、「吹く風にあらば（私が吹く風であつたら）」という現実に対する仮定を受ける句としては、「しばしば逢ふべきものを」と逆接で訓むべき例であろう。二三七七も「何せむに命継ぎけむ」という命を長らえたことを後悔する句を受けており、妹に恋をしないうちに死んでしまえばよかったと、現実に対することを希求して



いるものと読み取れ、「死なましものを」と訓むのが適當である。二三九一は上の句に昨日の夕べに相手をほのかに見たことが歌われ、下の句には今日の朝には恋に落ちていることが歌われており、「見しものを」の逆接によって、たちまちの恋が歌われていると見るべき例である。二四四八は譬喩歌仕立ての歌である。真珠製の間を開けて貫いた緒も括り寄せると再び玉と玉とが合うことが歌われている。これは、卷三の「譬喩歌」の部の冒頭に見られる紀皇女の歌

輕の池の浦み行き廻る鴨すらに玉藻の上に独り寝なくに（3・三九〇）

と類想の歌で、人間ではないものでさえ逢えるのにと歌い、自分は逢うことができないという嘆きを言外にほのめかす歌い方である。したがって「後もあふものを」と逆接に訓むべき例である。右のように見てきた場合、人麻呂歌集の特に略体歌においては、「物」字のみで付属語が表記されている場合には、特に解釈上問題がない限り、「ものを」という逆接を表記したものと見て大過ないものと思われる。

#### 四 答歌の訓

次に、答歌の訓について検討する。

第二句「枕人」。先述のように、旧訓には「枕」を動詞的に訓んでいたが、大系の「シキタヘノという枕詞をうけているので、『枕』は名詞に訓むのが穩当で、…」という指摘は妥当であり、「枕は（も）人に」「枕に人は」のいずれかで訓むのが適當である。いずれをとるかによって、「事問ふ」の主体が変わってくるのであるが、その点は後の解釈の条で触れたい。

結句「苔生負為」。まず「生」の訓であるが、万葉集中の「苔」の用例では、苔が生えることを言う動詞の表記はす

べて「生」字となっており、ムスと訓むべきか、ヲフと訓むべきか決定しがたいが、『歌経標式』の

妹が名は千代に流れむ姫島の小松が枝に苔<sup>むす</sup>牟須<sup>す</sup>までに

の仮名書きの例を見ることができ、苔についてはムスが用いられることがかろうじて確認できる。「負為」も諸本以来、「にけり」と「にたり」に訓が分かれている。稲岡耕二『人麻呂の表現世界』（岩波書店 1991）が、人麻呂歌集略体歌のタリの表記全体を視野に入れて、「為」をタリを含む歌の表記としているのに従うべきであろう。稲岡は、人麻呂歌集の略体歌においては、「――タリ」を含む歌を文字化する際、

①その動作や作用がすでに起きたことを抒情の焦点とする歌。

②その動作や作用が現在も続いていることを抒情の焦点とする歌。

③その動作や作用がすでに起き、しかもその結果がその後にも及んでいることを抒情の焦点とする歌。

の三種に分け、それぞれが、①↓無表記、②↓「在」、③↓「為」と表記を使い分けていることを分析している。当該歌の場合も、苔がすでに生えて、現在もその状態にあることを抒情の焦点としているものと見られ、それを表現するために人麻呂は「タリ」の表記に「為」字を用いたものと判断できる。

その他、「事問哉」は旧訓コトトヘヤに對し、コトトフヤと疑問に訓む説が提示されている（私注・大系・全注など）。いずれも文字面からは可能な訓であり、次の解釈の条で検討する。

## 五 二首の解釈

二首の歌は「枕」を軸として展開する問答である。二首を解釈するに当たっては、「枕」についての検討が不可欠で

あろう。

枕が男女の恋愛の象徴であることは、少し想像してみれば納得できることであろう。歌の表現で言えば、「枕づく妻屋」と、「枕づく」が夫婦共寝の妻屋にかかる枕詞となるのもそのためであろう。人麻呂の用例として注意されるのは次の歌である。

家に来て我が屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕（2・二一六）

人麻呂の泣血哀慟歌「或本歌」の反歌三首目である。妻を失った男が家に帰り、妻屋を見ると、妹の枕があらぬ方向を向いている。人麻呂の泣血哀慟歌については、「或本歌」から本文歌への改作とされているが、右の反歌に対応する長歌の末尾は、「うつそもと 思ひし妹が 灰にていませば」と閉じられる。衝撃的な表現であるが、人麻呂の時代は、火葬が始まって間もない頃——我が国における火葬の始めは、文武四年（七〇〇）の道昭の火葬とされている——であり、「灰にていませば」はそうした時代の中で獲得された表現なのである。妹の死を物理的に決定づける表現である。一方、「外へ向きけり妹が木枕」が、心理面で、妹の死を決定的なものとして確認させる働きを持つのは、「枕」が夫婦共寝の象徴であり、妹の魂の籠もった存在だからであろう。こうした理解は、「或本歌」から本文歌への改作のあり方からも確認できる。本文歌の長歌末尾は「うつせもと 思ひし妹が たまかぎる ほのかにだにも 見えなく思へば」とされる。妹が羽交の山にいと人に聞いた男は妹を探しに出かけるが、妹の姿を見つけられないままに長歌は閉じられる。「或本歌」から本文歌への改作は、妹の死を決定的なものとする表現から、妹の死を臚化した表現への改変と捉えられる。その本文歌の反歌には、右の「家に来て…」の歌は見られない。妹の死を確定的なものとして歌わない形に改変する際に、右の歌は削除されたのである。この改作のあり方は、「妹が木枕」が妹の魂のこもる枕であり、「外へ向きけり妹が木枕」が心理面で妹の死を確定的なものとして受け止める表現であったことを逆に証してい

るであらう。

『万葉ことば辞典』(大和書房 2001)の「まくら(枕)」の項(担当飯泉健司)は、

こほろぎの待ち喜ぶる秋の夜を寝る験なし枕と我れは(10・二二六四)

玉守に玉は授けてかつがつも枕と我れはいざふたり寝む(4・六五二)

に見られるような枕を擬人化する表現や、挽歌において「枕辺に斎瓮を据ゑ」て無事を祈る習俗のもとに、

逢はずとも我れは恨みじこの枕我れと思ひてまきてさ寝ませ(11・二六二九)

に見られるような、「枕を人の分身とする考え」があると指摘する。

我が背子は相思はずともしきたへの君が枕は夢に見えこそ(4・六一五)

と、枕を恋しい相手の代替物として歌うのも、同様の発想によるのであらう。こうした枕のあり方は、右に見た、恋愛の象徴であり、人の魂のこもる枕というあり方に通じる。

それでは、その枕が音を立てて眠れないとは、どういう状態を言うのであらうか。

さ夜更けて妹を思ひ出で敷妙の枕もそよに嘆きつるかも(12・二八八五)

は妹を思つて枕が音を立てるほど嘆いたことを歌った例であるが、右の歌では「嘆き」の結果として枕が音を立てるのであって、枕が音を立てて眠れないと歌う当該歌とは同列に扱えない。代匠記以来の通説では、自らが輾転反側して眠れずにいることを「枕動きて」と言ったとし、「枕とよみて」と訓む注釈も自らの輾転反側ゆえに枕が音を立てる意味と解している(同じく「とよみて」説をとる全注も同様の理解と見られる)が、歌の表現を見ると、枕が音を立てるほどに眠れないとは歌わず、枕が音を立てて眠れないと歌っているのであり、枕が音を立てることが眠れない原因となつていると見るべきであらう。「枕とよみて」は寝ている人間の状態を迂遠に表現するのではなく、枕そのもの

の現象として捉えるべきである。

そこで注目されるのは、恋にまつわる様々な俗信の存在である。

眉根搔き鼻ひ紐解け待つらむかいつかも見むと思へる我を（11・二四〇八）

眉根搔き鼻ひ紐解け待てりやもいつかも見むと恋ひ来し我を（11・二八〇八）

二四〇八は人麻呂歌集所出の正述心緒の歌であり、二八〇八は出典不明の問答歌である。前者を改作して問答に仕立てたものであろう。二首の歌には、「眉根を搔き」「鼻ひ」「紐解け」という三つの俗信が歌われている。眉根を搔くとは、

暇なく人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも（4・五六二）

月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く恋ひし君に逢へるかも（6・九九三）

めづらしき君を見むとこそ左手の弓取る方の眉根搔きつれ（11・二五七五）

眉根搔き下いふかしみ思へるにいにしへ人を相見つるかも（11・二六一四）

眉根搔き誰をか見むと思ひつつ日長く恋ひし妹に逢へるかも（11・二六一四 或本）

眉根搔き下いふかしみ思へりし妹が姿を今日見つるかも（11・二六一四 一書）

いとのかきて薄き眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ人かも（12・二九〇三）

などにも見られ、恋しい人に逢える前兆とされている。「鼻ひ」はくしゃみであり、「紐解け」は衣の紐（下紐か）が自然と解けることであるが、

我妹子し我を思ふらし草枕旅のまろ寝に下紐解けぬ（12・三三四五）

うち鼻ひ鼻をぞひつる剣大刀身に添ふ妹し思ひけらしも（11・二六三七）

からわかるように、くしゃみが出たり、紐が自然と解けるのは、恋の相手が自分を思っているためと考えられていた。二四〇八、二八〇八でも下の句に「いつかも見むと思へる（恋ひ来し）我」と歌われており、様々な現象が男の女に對する思ひの強さゆえのこととされている。早く逢いたいという男の思ひが女に作用し、「眉根搔き」「鼻ひ」「紐解け」という現象を起こしつつ待っているであろう女の様子が想像されているのである。

恋しい思ひが相手に作用する例としては、「夢」にまつわる次のような歌も注意される。

我が背子がかく恋ふれこそぬばたまの夢に見えつつ寐ねらえずけれ（4・六三九）

夜昼とい別き知らず我が恋ふる心はけだし夢に見えきや（4・七一六）

朝髪所思ひ乱れてかくばかり汝姉が恋ふれぞ夢に見えける（4・七二四）

思ふらむその人なれやぬばたまの夜ごとに君が夢にし見ゆる（11・二五六九）

相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えずうけひて寝れど（11・二五八九）

我妹子に恋ひてすべなみ白栲の袖返ししは夢に見えきや（11・二八二二）

確かなる使をなみと心をぞ使に遣りし夢に見えきや（12・二八七四）

白栲の袖折り返し恋ふればか妹が姿の夢にし見ゆる（12・二九三七）

すべもなき片恋をすこの頃に我が死ぬべきは夢に見えきや（12・三一〇一）

我妹子がいかに思へかぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる（15・三六四七）

いわゆる「俗信の夢」である。万葉集中には、自分が強く思っているために自分が相手の夢を見ろという、現代の発想と同じ夢も多く詠まれているが、その一方で、右の歌々のように、相手が自分を強く思っているために自分が夢を見る、あるいは、自分が相手を強く思っているために相手が夢を見ることを歌う歌も多く見られる。恋の思ひが相手

に作用し、相手の側に何らかの現象を引き起こす俗信の一つとしての夢である。

右のような恋の俗信を踏まえ、先に見た恋愛の象徴としての枕、魂のこもる枕という方を考える時、枕が音を立てて眠れないという表現は、万葉集中に用例こそ見出せないものの、女の男に対する思いが男の枕に作用し、枕がしきりに音を立てて眠れないことを言うのだと見ることができるだろう。

次に、「夜不寐」の訓釈。全集、新編全集は「夜も寝じ」と「不」を助動詞「じ」の表記と見て、男が相手の女の状態を想像しているものとするが、助動詞「じ」は基本的に未来の状態を推量する助動詞であり、今現在の相手の状況を推測する助動詞は「らむ」を基本とする。「夜不寐」を「夜も寝じ」と訓み、相手の現在の状態を想像しているとすると解釈には無理があるだろう。「夜も寝ねず」と訓む場合も、「ず」を連用形と見て、次の「思ふ」の修飾語となっていると解する説（大系、釈注など）も見られるが、枕が音を立てることを先のように理解する場合、下の句の「思ふ人」には後も逢ふものを「は相手の女に対する慰めの言葉と理解されるため、「ず」は終止形で、第三句で切れると見ることとなる。

総じて問歌は、

シキタヘノ マクラトヨミテ（サワキテ・ノナリテ） ヨルモイネズ オモフヒトニハ ノチモアフモノヲ

と訓み、「女の恋しい思いが作用して枕が音を立てて眠れない。そんなに恋しがらなくても思う人には後も逢えるものなのに。」と解釈すべきものと考ええる。先に挙げた「眉根搔き鼻ひ紐解け待つらむか」の歌のように、思い上がった男の歌である。

一方、答歌は、「その枕には苔生しにたり」と歌う。枕に苔が生えた点は、代匠記・精に「来又程ノ久シサニ枕ニハ早ク苔ノ生タリトナリ」と言うのをはじめとして、男の訪れのなさゆえの苔と解する注釈書が多い中、全注は、「奇怪

な、年を経た枕」「氣味の悪い枕」という理解を示している。万葉集中で「苔」の用例を見ると、

いつの間も神さびけるか香具山の梓杉の本に苔生すまでに（3・二五九）

奥山の岩に苔生し畏くも問ひたまふかと思ひあへなくに（6・九六二）

奥山の岩に苔生し畏けど思ふ心をいかにかもせむ（7・一三三四）

結へる紐解かむ日遠み敷栲の我が木枕は苔生しにけり（11・二六三〇）

我妹子に逢はず久しもうましもの安倍橘の苔生すまでに（11・二七五〇）

葦原の 瑞穂の国に 手向けすと 天降りましけむ 五百万 千万神の 神代より 言ひ継ぎ来る 神なびの

みもろの山は 春されば 春霞立つ 秋行けば 紅にほふ 神なびの みもろの神の 帯ばせる 明日香の川の

水脈早み 生しためかたき 石枕 苔生すまでに 新夜の 幸く通はむ 事計り 夢に見せこそ 剣太刀 斎ひ

祭れる 神にしませば（13・三二二七）

神なびの三諸の山に斎ふ杉思ひ過ぎめや苔生すまでに（13・三二二八）

「苔生すまでに」と歌う例は、いずれも長い期間を表現する例であり、九六二、一三三四は岩に苔が生えた状態を序として「畏し」が導かれている。全注が「奇怪な、年を経た枕」という解釈を導いたのは、こうした例からなのであるが、やはり参考とすべきは「我が木枕は苔生しにけり」と歌う二六三〇であろう。二六三〇では、「結へる紐解かむ日遠み」と歌われており、男の訪れがないゆえ木枕に苔が生えてしまったことを歌っている。当該歌の「苔生しにたり」も、同じような方向で理解すべきである。問歌の枕が音を立てることを先のように理解すると、答歌の「苔生しにたり」には、男の訪れが全くないことと同時に、男の思いは全く届いてこないことを表現して、思い上がった男の歌に対して切り返しているものと解釈できる。



その場合、「枕人 事問哉」はマクラモヒトニコトフヤと訓むのが適當である。問歌の枕が音を立てるといふ表現を受けて、枕も人に言問いをしてくれるのですか、と歌い、自分の枕を見て、私の枕は何も言ってくれないどころか、もう苔が生えてしまっています、と歌うのである。その場合、「その枕」といふ表現が問題となってくるが、この「その枕」は相手の枕を指すのではなく、上の句に「枕も人に言問ふや」と歌った枕を文脈指示的に指すものと解せるであらう。

総じて答歌は、

シキタヘノ マクラモヒトニ コトトフヤ ソノマクラニハ コケムシニタリ

と訓み、「あら、枕も人に言問いをしてくれるのですか。私の方の枕には、あなたが長く通って来ず、あなたの思いも全く届いてこないのです、もう苔が生えてしまっていますよ。」と解釈すべきものと考ええる。

## 六 おわりに

卷十一の人麻呂歌集所出の枕問答の歌について考えてきた。「動」の訓、「その枕」の理解など、まだまだ考えるべき問題は残るが、一応の理解を示して、大方のご批正を請う次第である。

(本学助教授)